

カムチャツカ半島先住民のビーズ工芸

大島 稔

1-なぜガラス・ビーズは重宝がられるのか

北海道から北東へ、北方領土の千島列島を北上すると、オホーツク海とベーリング海にはさまれて北太平洋を南へと今にも泳ぎださんとするサケの姿をしたカムチャツカ半島がある。その半島の先住民（チュクチ、コリヤーク、イテリメン）にとって、過去においても現在においてもガラス・ビーズは装飾の素材として欠かすことのできないものである。

16世紀後半から、ロシア人がクロテンなどの毛皮を求めてシベリアを東進し、17世紀前半にはカムチャツカ半島北部に達した。クロテン増産をめざして新しい土地を求めるロシア帝国の国策のため、コサックの将校ウラジーミル・アトラソフ率いる探検隊は、ナイフや斧などの鉄製品と毛皮を交換しながら、毛皮税（ヤサク）を課す土地と人を求めて、1697年から1699年までのあいだカムチャツカの東海岸と西海岸を踏査した。

ガラス・ビーズがカムチャツカ半島の先住民の手にわたるのは、このアトラソフ探検以降と考えられている。ガラス・ビーズが入ってからの先住民の衣類、特に晴れ着はビーズなしには考えられないほどになっている。

ロシア語では、ビーズ一般を *biser*（単数）、*bisery*（複数）、大型のビーズは *korol'ok*（単数）、*korol'ki*（複数）。ガラス製ビーズは、特に *st'ekl'arus* と呼ぶ（*st'eklo* 「ガラス」と *yarus* 「段、層」）。先住民語では、コリヤーク語でクッリラウ（*kElililaw*）、イテリメン語でクッラウニチ（*kEl'l'a2n'ch*）という。ともに複数形で、個々のビーズ玉ではなく、ビーズを糸に通して一本にしたビーズ紐を指す。

ガラス玉以前にもビーズは存在した。柔らかい石、骨、牙、歯、貝殻、琥珀などがガラス以前のビーズの素材であったと考えられている。素材は違うがビーズがすでにあつたからこそ、美しいが新奇なものであるガラス製ビーズが広く受け入れられたと思われる。カムチャツカでもビーズは古くから存在したであろう。狩猟者は、豊猟のお守りとして先祖伝来のクマの爪や歯のネックレスを現在でも使っている。

2-衣類とガラス玉

カムチャツカ先住民は、コフリヤンカと呼ばれるトナカイ皮の上衣（*イッアン it2an/イチャン ic2an*）を現在でも着用している。特に戸外で仕事をするトナカイ飼育民にとっては冬期間の衣服として必需品である。都市に住む人でも祭りのための晴れ着（*ケルケル kerker*）として持っている。コリヤークの人々は、さまざまな祭りでコフリヤンカなしには踊りもできないし太鼓歌も歌えないという。写真1に見るように特に女性の晴れ着には、刺繍と垂れ房の他にたくさんのガラス・ビーズ装飾が使われている。



写真1 歌と踊りに欠かせない晴れ着のコフリヤンカ
(オリュートルスキー地区ハイリナ)



写真2 コフリヤンカの細部
(オリュートルスキー地区ヴェルヒニ・パハチ)

ビーズ細工は、今でも先住民の女性のたしなみで、母から娘へと伝えられる技術である。新しく服を作るたびにビーズ細工をするのではなく、ビーズ細工は日常的な女性の仕事で、暇があれば、トナカイの^{けん}脛から糸を^よ繕るかビーズ細工をしている。まず糸にビーズを通し、なめしたトナカイ皮または布にビーズを縫いつけておく。デザインはすでに頭の中にあるので幅広のベルト、紐状、円などの形のアップリケ（切り伏せ）をいくつも用意しておくのだ。トナカイ皮を小便につけて、なめし板となめし具で油脂を取り除き、ハンノキの皮で赤く染めて燻煙した後で服に仕立てる。仕立て終わると、用意してあったビーズをアップリケとして服地に縫いつけていく。縁取りにはクロテンなどの毛皮獣の毛皮をあしらい、染めたトナカイやウサギの毛の垂れ房（ピニャカウ：pin'aqaw）とビーズ紐を組み合わせ「垂れ」にする。垂れの下端には鉄製の鈴がついていることが多い。

写真2で詳細がうかがえると思うが、円形のビーズ細工（ユツイルグン：jE2ilgEn）は、神である「太陽」と「月」を象徴している。その「太陽」と「月」から垂れ房やビーズ紐を2本ないし3本ぶらさげるのが基本的なデザインである。多くの「太陽」や「月」をコフリヤンカの前身ごろと後身ごろに配置するが、その配置の仕方には地方差や個人差があるものの、基本的に左右対称となるように配置する。

晴れ着とは異なり、死装束のコフリヤンカには、色ビーズはほとんど用いられない。死装束には白いトナカイの毛皮と犬の毛皮が用いられ、全体の色調は、白で、染色した毛とアザラシの食道を使った黒白の格子模様などで構成されている。

その他に靴にも帽子にもビーズの切り伏せが使われる。特に靴の胴部の皮の合わせ目には、縦にも横にもベルト状のビーズを用いる。靴底にはすべりにくくするためアザラシの皮を使うが、擦り切れると、靴底だけ取り替え、ビーズを施した胴部は次世代へと受け継がれることが多い。帽子は、本体がトナカイの毛皮で顔が当たる縁取りには犬の毛皮などの吐く息で凍らない素材を使う。コフリヤンカと同様にベルト状のビーズ細工、ビーズ紐、染色した毛の垂れ房が取り付けられる。写真1に見られる女性がかぶるヘアーバンドは、全体がビーズで構成されているといつてよい。

3 装身具と容器

現在ではほとんど見られないが、他のさまざまな装身具にもビーズが用いられていた。

少女と女性は、昔の髪型では、三つ編みのお下げにして柔らかい皮のリボンを編み込み、その端にビーズをつけていた。

また、少女と女性は、脛の糸に明るい色のビーズを通したイヤリングをつけていた。この



写真3 子供用の冬の帽子(カラギンスキー地区カラガ)

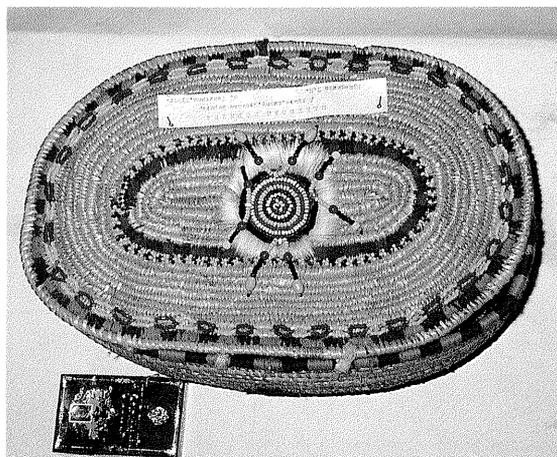


写真4 草製バスケット(オリュトルスキー地区ティリチキ)

イヤリングは、時には肩に達するほど長いものであった。イヤリングには、銅製の耳輪にビーズ紐を下げてその下端には青銅片をつける。ネックレスにもビーズと銅・青銅が使われた。

また、皮製煙草入れ、針刺し、皮製の容器、草製容器などさまざまな容器にも衣類の場合と同じ切り伏せの方法によるビーズ装飾が見られる。写真4のように日用品の容器にビーズの装飾を施すのは、現在でも盛んである。

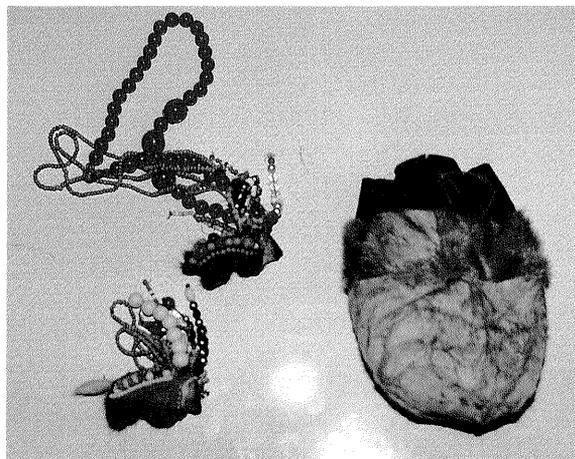


写真5 木偶のお守り(カラギンスキー地区カラガ)

4 一儀礼とガラス玉

コフリャンカのビーズ装飾「太陽」と「月」にも見られる

ようにカムチャツカ先住民コリヤークの衣類には、神話の世界が反映され、「太陽」と「月」の力が、着ている人(特に内臓)を悪霊から守るという呪術的な意味が込められている。コフリャンカには、首のところから前垂れが下がっている。この前垂れも邪悪な呪術者から呪術をかけられたときに身を守るためのものといわれている。また、ビーズ細工のデザインそのものが悪霊を追い払う魔よけの形を組み合わせたものであるといわれている。

カムチャツカでは、このように宗教や呪術に関する信仰がビーズ細工に具現化されている。先の写真2に見られる「太陽」と「月」の象徴は、ビーズ製の円(裏面に小石を皮袋に入れて縫いつける)にクロテンなどの毛皮で縁取りをして、ビーズ紐を2本から3本垂らして首から下げて単独で護符として用いられる。これは旅人に旅の安全を祈願して贈られる。そのような護符が、現在ではネックレスの土産品として流通するようになったが、旅の安全祈願の意味を失っているわけではない。

コリヤークには、写真5に見られるような女性のみが代々継承する木偶(ギチギ: gicigi)がある。写真5の木偶は、家族のトーテムであるクマを象り、クマの毛皮を着せ、その上にビーズを切り伏せ縫いしてあり、願い事を行うたびに、ビーズ紐を捧げて結ぶ。家族に病人が出たときには、脂肪や乾燥した魚や肉片などを食べさせ、また水をその口に含ませて、病気の回復を祈願し、どのように治療したら良いかを尋ねるといふ。

写真6のコリヤークの火起こし板は、シラカバ製で、カラック(kalak)と呼ばれる。カ

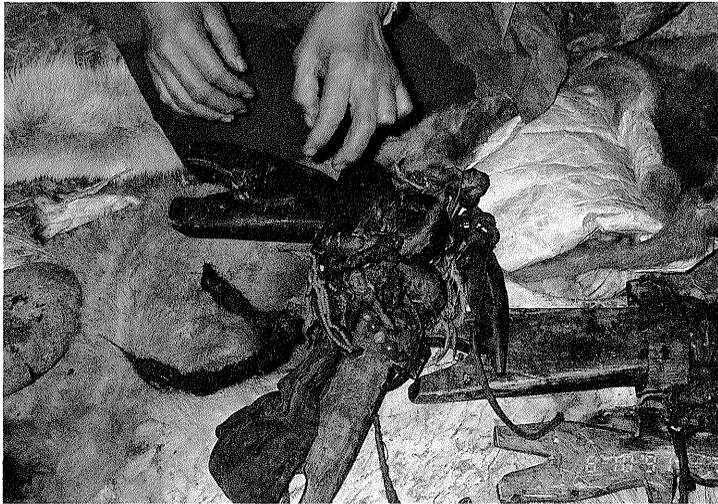


写真6 火起こし板のカラック(ペンジンスキー地区マニリ)

ラックは、作るのは男性だが、それを保管し、儀礼に際してこれを使って火を起こすのは女性である。原則として拡大家族(複数の核家族が血縁で結びついた家族制度)の長女がこれを代々継承する。古いもので何代前に作られたのかすでにわからなくなっているものも多い。したがって、火起こし板や木偶には何世代も前の交易で得たビーズが使われていることがある。

カラックは、家族を悪霊から守る家の守護神であり、また海獣とトナカイの守護神でもあるので、海獣儀礼やトナカイ儀礼には欠かせない儀礼具である。カラックの上部には目と口があり、首のところに服として草が巻かれ、ビーズ

紐の装身具が結ばれている。また、通常、火起こし板には、青いビーズの皮製人形、トナカイ飼育者を表す木製人形、オオカミなどの動物木偶、供物用のスプーン、孔の開いた聖なる石などが図6に見るように数珠つなぎに結びつけられている。

また、クマを捕った家では、草やビーズで飾ったクマの頭蓋骨をしばらく屋内に安置する。また、あの世の精霊と先祖の霊との仲介の役目を負うシャーマンの場合には、草とビーズで飾り立てたクマの頭蓋骨は、シャーマンがあの世界へ旅をするための助手である。また、コリヤークの片面太鼓は太陽を象っており、この世の人間の思いをあの世に伝える道具であるが、ある女性シャーマンが使う太鼓には、裏面の十字に走る紐の交差部分の取っ手にビーズで象ったクモが結びつけてある。このクモは、コリヤーク語でアンニャピリ(an'n'apil')といい、「火山に登り火をくわえて戻り人間に火をもたらした」という神話に基づく象徴である。

ガラス・ビーズはカムチャツカ半島の先住民にとって衣服の装飾や生活用品の装飾の素材として用いるという芸術的な機能もあるが、もう一方ではビーズで象る形状とともに果たす呪術的な機能も忘れてはならない。ガラス・ビーズが毛皮交易を通じて半島にもたらされる以前は、ガラス以外の素材が芸術的・呪術的意味を担って用いられていたであろうが、いったんガラス製ビーズがもたらされるとガラス・ビーズが古い素材のもつ霊力を引き継ぎ、新しい素材の役割を引き受け、ビーズ工芸全体を大きく変貌させてしまったといえる。